Antoine Lévy, ‘Porphyrius Christianus: L’intégration différenciée du platonisme à la fin du IVe siécle (S. Grégoire de Nysse / S. Augustin d’Hippone)’, *Revue des Sciences Philosophiques et Théologiques* 88(2004) 673-704.

上 村 直 樹

ニュッサのグレゴリオスとヒッポのアウグスティヌスが、東西の教会におけるプラトニズム、とりわけ新プラトン主義の影響についてのもっともすぐれた証言者であるという観点から、新プラトン主義的な要素を解釈する方法を検証することによって、両者の思考の異質性が不調和のままに捉えられるか否かを考察する。まず、グレゴリオスとアウグスティヌスが、プロティノスとポルピュリオスの系譜に依ったことを確認したうえで、«Ἀληθὴς φιλοσοφία – vera philosophia»という概念をキリスト教の啓示のもとで諒解していたことを明らかにする。ついで、両者のテクストとプロティノスのテクストを比較しつつ、いかにプラトニズムの根本的なテーマが探求されていたかを示す。彼らがプラトニズムをまったく同じ仕方で解釈しなかったにせよ、一貫して「真の哲学」を追求したことが認められる。ついで、ミクロコスモス（魂／身体）とマクロコスモス（神／世界）の関係性についてのポルピュリオスの教説に着目し、グレゴリオスとアウグスティヌスが、相互に独立して、その教説に影響を受け、それが神と被造物の関係についての両者の神学の成熟にとって無視できないことを見いだす。そして、根本的に異質と見なされる東西の二つの伝統において、神の被造物に対する支配というテーマをめぐって、同一の源泉に基き、各々の思考を展開したことを示唆する。